

# 東京音楽大学リポジトリ

## Tokyo College of Music Repository

武家故実の研究(その二) :  
日本の都市における一般社会の家庭内の《正月行事》

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1990-01-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/713">https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/713</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 武家故実の研究（その二）

山根 章弘

日本の都市における一般社会の家庭内の

### 《正月行事》

はじめに——日本の行事・儀式の起源——

日本では古来から、一年十二カ月、月月によって季節に合わせた行事が行われている。古くは「月次行事」、通称「年中行事」という。近世から現代にかけて一般市民社会で行われていた年中行事の大半は、すべて室町時代以降の武家社会で行われていたものが基本となつて普及していったものだった。

それでは、宮中（みやうちゅう）（天皇家を中心とする宮廷。以後「宮中」と書く）の生活や行事は、一般庶民の生活や行事などの基準とはならないか、というと、宮中では極めて古くから様々な儀式が執り行われてはいたのだが、これらは全くといっていいほど一般庶民とはかかわりのないものであった。というのも、戦前までは、表面的なことは別として、宮中の事を口にしたたり真似したりすることは絶対的なタブーであり（註・私の大叔母や従姉など数人は、明治帝以来つぎつぎに御所みやしろへ宮中のことへ上つてお仕えしたのだが、彼女等が御所から下つて

山根家に戻った後でも、私がどんなに訊きただしても、宮中の内部のことは一切口を閉ざして死ぬまで答えようとしなかったことでも判る。）宮中での生活様式や儀式あるいは言葉づかいに至るまで、それらは民間に傳わるなどという事は全くなかったからである。

更にいえば、確かに宮中では由緒正しい厳かな行事や儀式が行われていたのであるが、室町時代になると、朝廷の力が衰えてきて、宮中で従来通りの十分な儀式が行われなくなつてしまつたのだった。そのとき、朝廷にとつて代つて、宮中の儀式などを取り入れたのが室町幕布であり、それ以後の將軍家や武家たちであった。彼等は宮中で行われていた年中行事の中の優すぐれて美しい部分を全部取り入れた。しかし宗教色はなるべく拭い去り、それを武家風にアレンジして年中行事の儀式ととして着実に繰り返し返してつづけて行つた。やがてそれが武家社会一般で行われるようになったのである。

## ✦ 民俗学の独断

柳田国男以来、日本でも「民俗学」というものが盛んになり、現在では、日本の行事に関する記述や由来などが、すべて民俗学の立場から独断的に解説されているのが現状である。本来は武家という支配階級が伝えながら完成させてきた行事の様式が、徐々に日本社会全般に行き渡ったという事実を、民俗学は一切黙殺したり見逃したりしている。

特に、正月の行事などに関しては、その由来や意味などを、現在あるいは数十年前までの農山村（漁村を含む）で信じられている「歳神様」一つだけに絞って押し切って解説している。——例えば、お正月は「トシの神（歳徳神）」を迎える日であって、「もしもトシの神がやって来られないことがあるならば新年にはならない」（『日本を知る小事典』社会思想社刊）などと断定している。「トシという言葉は米のことで、トシの神は米作りの神様であり、正月に家々にやって来て、今年の稲作の豊作を保証してくださる神様である」というのだそうだ。

そんな通説が強く一般に行われていて、古い歴史的な記録や有職、殊に故実の学や、数多くの学問的研究の成果などは一切無視し、現在あるいは数十年前の頃に、日本の農山村で古老に信じられていた由来話を、それが唯一絶対の意義や起源と信じて、それを採用しているのである。ところが逆に、この説明は、もともと農業中心であった日本

という国の庶民一般には、まことにもっともらしい共感をもって易く受け入れられる要素に満ちていたのだった。

その「民俗学」という立場の探索法においては、歳神様がどの程度古くから、又いつの時代から信じられてきていたか、などという研究のデータなど一つでも提示されているのを、寡聞にして見たことがない。説話の起源にしても、せいぜい二〇〇年から三〇〇年位の昔にしか遡ることができないのではなかるうか？——その意味でも、日本の民俗学が体系的な学問というものになっているのか、果たして「学」と謂える厳密な科学性をもっているのかは、極めて疑問なことである。

✦

ところで「歳神」という民俗学の解釈の根拠となる資料や古典籍があるのか、というと、江戸時代中期の古典籍には「歳徳神」や「トシの神」という用語や記述は、ほとんど拾い出せない。数十年前に完成されて完璧に近い国語の辞書と評価された『大言海』の中には、「さいとく」の項はなく、辛うじて「としかみ（年神）」という一項目が目につくだけである。そしてその説明は「五穀ヲ守ルト云フ神。年穀ノ神」とだけしか記されていない。又『古語拾遺』には「是レ今、神祇官ハ白猪、白馬、白鶏ヲ以テ御歳神ヲ祭ルノ縁ナリ」などとあって、歳神はあるが、それは新年の由来とは結びついていない。

✦

マリノフスキーという人類学者が、今世紀初頭に南太平洋の中のトロブリアンド諸島という、当時は西洋人はまだ誰も足を踏み入れたこ

とのないミクロネシアの島々を調査して、そこに全く原始時代そのま  
まの（と思われる）文明に毒されていない非常に素朴な原住民の生活  
を目にして、それを克明に記録して報告した。学界には大変な衝撃を  
与えたものであった。それは〈西欧文明〉から隔絶された島に古代の  
原始的な人類を彷彿させる姿や生活がそこにあったからである。民俗  
学の始まりである。

しかし、マリノフスキーの方法論を以って、日本人の古来の生活や  
儀式が日本の農村に太古から純粹に保存され続けていると断定する  
のは間違いである。日本の農村は、一切の文明から隔絶された原始の  
未開社会ではないからである。また、そんな素朴な原始社会という先  
入観で日本の農村を見たり接したりするのは、農村に対する侮辱であ  
る。それとは反対に、士農工商といわれてきたように、日本では農村  
の農民が日本の社会構造の根幹部を形作り、特に武家社会になってか  
らは、武士階級と農村農民とは相互依存の形で直結していたとさえ云  
うことができる。

それ故に、武家社会の礼法や生活様式などは、六〇〇年もの昔か  
ら、農村社会に入り込んでいったと考えるのは当然であろう。その入  
り方、導入の方法は、客観的、論理的ではなくて、主観的、情緒的で  
あり、直接的に継承して行く、というよりは、間接的に傳播して行  
く、というような形で取り入れられていったのであった。

例えば、武家のお邸へ奉公に出ている農村出身の若い女性が、結婚  
あるいは盆、暮れの里帰りなどで親許のムラへ帰ったときなどに、土  
産話として伝えられた事もあるであろう。昔の農村社会では、情報傳

達の手段としての文字を知る者は皆無に近いものだったから、傳達は  
もっぱら口傳えによる広がり方であつたであろう。その傳わりの過程  
で、武家屋敷の中でのシキタリや様式の本来の意義や形式は、いつの  
間にか変形されたり誇張されたり欠如したり間違つて伝えられたりし  
たことであろう。——こうして、農山村としての生活様式や年中行事  
の儀式的な様式などが出来上り伝えられ、それがいつの間にか彼等の  
間では、その農村に極めて古くから傳わつて来たものと信じられてし  
まった、と云うことができる。

ここで、歳徳神に話を戻してみる。改めて云うまでもなく、農村だ  
けが日本の国土ではない。たしかに、農業国家、農本主義の日本国で  
はあつたが、鎌倉室町時代から現代に至るまで、日本という国土や国  
民に対して支配的な政治力や文化傳達力を持っていた幕府やその配下  
の武士、武家、明治政府やその一統の役人から一般の町役人、更には  
それと関わる町人たちは、農耕をしなかつた。だから、日常生活の平  
常心にとつてトシ（米穀）の神にはほとんど関わりがなかつた。

※

改めて言う。正月という儀式や行事は、歳徳神などとは関係ない。  
正月の行事は、王朝時代から続いて来ている支配階級のものに起源を  
もち、以後、それにあやかり、その由来に基づいて行われて来たので  
ある。

一、〇〇〇年以前の昔から連綿と続いていた厳かな正月儀式の意義  
を、我々は見失つてはならない。

## 一、正月の儀式的意義

正月の儀式は、日本の礼法の集大成である。——つまり、床の間の飾りや屋内外のかざり、贈進や年始という御機嫌伺い、主客の応答や応接の作法、酒や口取りや料理のすすめ方や受け方などなど、正月の行事には日本古来の礼法のほとんどの要素が集約されている。

元旦（一月一日）は日本人すべてにとって、古来から厳肅な日であった。年の元始、月の元始、日の元始という三つの元であることから、正月を「元三」（正式には《グワンサン》と発音）ともいった。

旧い年を送って、心あらたに新しい年を迎えるのであるから、その年の安らかさと豊かな稔りを四方の神々に祈願する朝廷の「四方拜」の儀式は、王朝時代から現在まで続いている。武家社会が誕生して強い支配力を持つようになると、室町幕府でも一年のうちで最も重要な儀式として「元三」の儀の四方拜が行われ、江戸幕府になっても終始、この儀式は厳肅莊重に執り行われ続けられた。

一部の農山村の住民を除く一般庶民の間でも、正月の儀式は公式にならって、どの家でも同じような心得と段取りで進められたのだった。

※

江戸町人も武家に倣って正月の儀式を厳かに執り行なったことが、西川如見著『町人囊』〔巻二〕の次の一節で伺える。西川如見は一七七八年將軍吉宗に招かれた天文学者であり啓蒙思想家であった

（二六四八—一七二四）。

「或る人の曰く、日本正月の儀式は、神代の風俗をうつして、清淨質朴を本としたる禮法なり。松竹の直ぐなる姿、常磐なる色も、人の心を直をに常あらん事をしめし、蓬萊のかざり、雑煮のしなぐ、木具太箸の体、質素をよしとす。老人をことぶきうやまい、若きをよるこび愛す。是れ則ち天地の仁心、春にあらわるゝの故なり。節のまふけ（設け？）も、かろく簡略を本とす。」

※

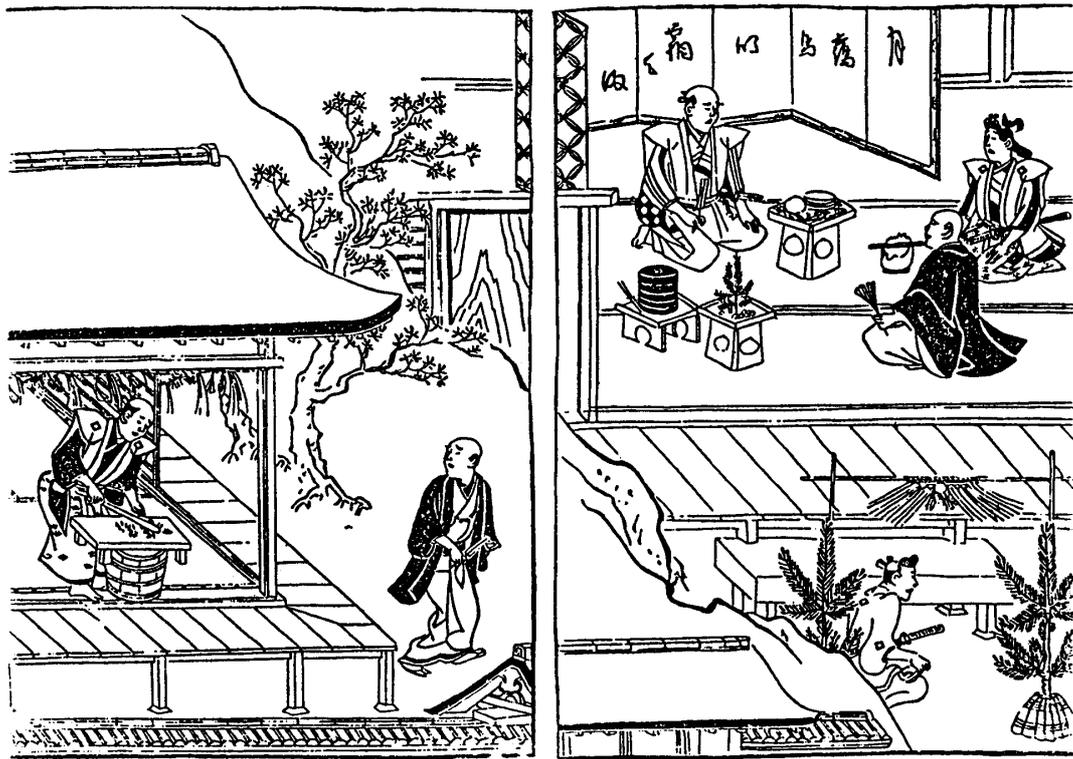
以下、正月儀式に関する諸項目について一つづつ説明して行く。

## 二、「元旦の儀式」の概略

貝原益軒の名著『日本歳時記 全四巻』の巻之一、正月の項の記述が、江戸中期ごろまでの正月行事の模様を端的に傳えていると思われるので、益軒の記述（カギ括弧内）を忠実にして、その他の資料は（煩雑だから資料名は挙げずに）、それらの精髓を肉づけにして、元旦の儀式の概要をまとめてみる。

※

「除夜（大晦日の夜）からずつと寝ないで朝を迎える。もし寝てしまった場合は、早朝、寅の刻の初めに起き出て、新年を迎える。」  
年男になる男性が袴姿の正装で、注連を張った井戸から若水（元旦に汲む水）を汲み上げる。この若水を沸かして「福沸し」といった。元旦の食卓に使う素材である。前夜から清らかに掃き清めてお



『卜養狂歌集』

いた家の庭の一隅、又は室内にあって若水に齒朶しだの葉を入れた「盥たらいの水で洗顔し齒を磨く。そして髪を結い身づくろいを整え浄衣じやうい（清浄な下着）を身につけ禮服を着用して威儀と容すがた（すがた）貌かたち（かたち）をととのえて、齋戒さいかいし、香をたき、天地の神々を禮拜したあとに、父母存命のときは父や母のところに伺って共に新年を迎えたことをよるこび、父母の居ない人は先祖の祠堂の前に伺候して香を焼たき拜礼して、無事に新年を迎えられたことを心から悦ぶのである。以上の禮をすべて終つてから、初めて春盤はるばん（正月の祝い酒や料理）を飲食するのである。」

＊

現代風に云えば、先ず年長の人たちの部屋に伺つて「明けましておめでとうございます」と挨拶をする。——これを正月の賀詞という。そして年少者から使用人に至るまで互いに「おめでとう」の正月の挨拶をするのである。

やがて一家全員が一番広い座敷に集まる。全員そろつたところで、一家の主あるじは、一番年少の者から屠蘇酒じよそしゆを提子ひきげ（柄えには礼法折形れいぽうせがたの蝶ちょう花形はながたが結びつけられている）から大中小三つ重ねの盃さかづきにそれぞれ注いで飲ませてゆく。そして順次一家全員がこれを飲んで長寿を祝うのである。

＊

次が食事であるが、「食事に移る前に、雑煮を先祖の靈に供え、酒を献上する。これを終えてから自分たちも雑煮を食し、屠蘇酒を飲み、飯を食い温酒を飲み、終了する。」——現在はこれを「雑煮を



〔日本歳時記〕や香炉が置かれ、目出度い凶柄の掛軸のかかった壁面の前に、山海の産物を盛り上げた「蓬萊」(又は蓬萊飾り。江戸では「喰積」といった)が、大きな三方の上に乗せられて飾られたものが置かれてある。——「年始同礼の客があつて室内に招じ入れた場合には、まずこの蓬萊を客前に差し出し」(『日本歳時記』)それを一箸とらせて饗応してから屠蘇酒を出した。明治時代になってからは一般中流上流家庭では蓬萊飾り(喰積)はほとんど姿を消して「お節供」と稱する料理を漆器の重箱の中に美しく飾り盛つたものを年始客にもてなすようになった。

＊

門構えのある家では、門の左右に苗木の松を飾り(門松)、松の樹の持つ千年の長壽の命を願つた。藤原時代に始まるこの門松のしきたりは、江戸時代になつても引き続いていて、三本足の門松が多く飾られていた。

また、どの家でも玄関の入口や神棚などに、藁で作って紙の垂を垂らした注連繩(前垂注連)を張り、外部からの汚れを追い拂い、内部を清浄に保とうとした日本人の心を表わした。これは延喜年間頃(九〇一—九二三年)に始まつたといわれる習慣で、現在に至っている。

＊

慶でたい長壽の松の門を通り、神聖な注連繩の下をくぐつて清浄な礼装を身につけた人人は、上役の人や親戚知人の家に「正月の廻礼」に行つた。この廻礼は藤原時代から大変盛んになったようである。室町時代には、「新しい年の賜物」という意味で「年賜↓年玉」とい

い、太刀や金銀や硯や筆などを贈呈した。江戸時代には、次々に来訪する廻礼の客にはいちいち応対しないで、玄関上り框のところ硯箱と年賀帳を載せた机を置いておき、来訪した各人は「おめでとうございます」と奥に向かつて挨拶の声をかけたあとで、玄関先でその年賀帳に氏名を記帳してそのまま帰つたのだつた。明治時代中期になると、名刺が普及したため、格式ある家では、玄関の上り框のところに漆塗りの小さな函や盆の「名刺受け」を置いていた。来客は、挨拶の声をかけた後、名刺受けに自分の名刺を入れたり置いたりして辞去した。

参考文献の一例 岡本綺堂『風俗江戸物語』

### 三、元旦・四方拜

その年の最初の日に、一年間災いがないように、豊かな幸せがあるようにと心に思うのは、現代に生きる人々よりもはるかに昔の人の方が強かつたにちがいない。

『和漢三才図会』(一七七八年刊)には、

元旦寅ノ刻 天子四方拜シテ 當年星 本命星 唱ル事七遍 国泰  
安民ヲ祈ル 之ヲ四方拜ト謂フ 寛平二年始マル

四方拜のことは、古く一條兼良の『公事根源』(一四二二年)に記されている。

「正月

一、四方拜 一日

四方拜といふ事は、元正、寅の時に すべらぎ 属星を唱へ  
天地四方山陵を拜し給て 年災をも拂ひ寶作をも祈召さる儀にて  
侍るや。」

解説してみよう。「元旦の寅の刻(午前四時半ごろ)に、すめらぎ  
(皇)すなわち天皇が清涼殿の東庭において、天地属星(北斗七星  
の中で本命に属する星)や天地四方の山陵を拜して、これから迎える  
一年間の災いを穢い清め、この年の豊作を祈る儀式が一月一日に行な  
われる四方拜である」ということである。寛平二年(八九〇年)宇多  
天皇によってこの儀式が行なわれたのが始まり、といわれている。

この四方拜という王朝以来の朝廷の厳かな儀式にあやかって、武家  
社会に於ても、元旦という日を厳かに心をひきしめて天地に祈る日と  
して、この日を日本人全部の祝日とし休日とした。

元旦の「旦」は夜明けのことであり、本来は正月の夜明けのことだ  
った。そこで元旦は寅の刻の初めまでには起床することになったので  
ある。現代のように、元旦は寝坊をしてもよい、と考えたりするの  
は、正月本来の意義を見失っていることになる。

一年の計は元旦にあり、という諺があるように、誰もが元旦には、  
これから迎える一年間の計画や抱負や夢を描いたりする。『菜根百事  
譚』という本に、次のような、とてもいい話が載っているので紹介す

る(現代文に直した)。

大膳大夫・大江元就は、毎年元旦の早朝より、身を清めて東方に向  
かって黙座するのが習慣であった。ある年、近習の粟屋彌次郎が、  
元旦の祝膳が調いでしたが……と伺いをたてたが、元就は何の返答  
もしない。何度目かのお伺いのあと、元就は彌次郎を別室に召し出  
し、汝は元旦を祝する道理を存じておるか? と質問した。彌次郎  
が返答する言葉に詰まっていると、元就は次のような話をした。

「世の中の愚かな者は、恵方を拜し、昆布、かち栗を手に取り口  
にして屠蘇酒を酌み、長壽や子孫繁栄などを祝うだけで終ってしま  
い、他に深く考えることをしない。私がいま志ざすところは、元三  
(元旦)は年の始、月の始、日の始であるから、寅の早朝(午前四  
時半ごろ)から起き出て、この一年間の計画を立てることであ  
る。例えば、去年の例から考えて今年の成り行きを考えると、東の  
方の国々は五穀豊饒ではあったが、西の方の国々は旱魃と水不足が  
つづき、国に住む人々すべてが安らかな気持でいられなかった。こ  
のような時代だからこそ、国家安全の備えを十分にととのえて、い  
ざという時になっても、上の者も下々の者も一様に動揺したり混乱  
したりしないように覚悟をしておくこと。これこそ元旦の祝い  
の意義というものである。それだからこそ、一年の計は春にあり、  
一月の計は朔にあり、一日の計は鶏明にあり と古くから云われ  
ているのである。」

#### 四、門松

「松迎え」という言葉がある。正月用の飾りの松を年の暮れのうちに山野から採って来て飾ることを云う。ところが、よく「門松を立てること」を「松迎え」という用語で表現している記述や談話をよく見聞きするが、これは誤り。更に「門松は年神様の依り代だ」という説が現在圧倒的に広く行きわたっている。依り代とは、民俗学の解説によれば「神霊の依り憑くもの」とされている。つまり、年神様の霊が



『女用智恵袋』

降りてきて宿るところが門松だ、というのである。——ここでは歳徳神だけで片づけられてしまっているが、それらの独断的な通説には、その解説の典拠となる古典籍の書名など何一つ引用されていないのだ。農山村という一部の社会で信じられていた信仰、或いはおどろおどろしい迷信や傳承を誰かが取材して、それを一般すべて、或いは古来の門松の起源としてしまっているのである。

※

實は、門松の由来は古く、中国は唐の時代に、松の枝を門戸に挿して松の葉効をからだに浸み込ませ、松に象徴される長壽を願った(例『歳華紀麗』)という。この風習が屠蘇の習慣と共に我が国にも傳來して、平安初期ごろから、主として大宮人(おおみやびと)の間で「松は常緑の色あざやかに、且つ年齢を若やいだものにする」とされて門松として飾られるようになったのである。

資料例① 一條兼冬『世諺問答』には「門の松立つる事 昔よりあり 来れる事なるべし。」

資料例② 兼好法師『つれづれ草』に「明けゆく空の気色、昨日にかはりたりとは見えねど、ひきかえ めづらしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。」

清掃した都大路の両側に立ち並ぶ門松の緑の美しさは、荘重な正月の朝の華やかな街並みの美学であった。堀川院百首の中に頭季の歌がある。

門松をいとなみたてるその程に

春あけがたに夜やなりぬらん

伊勢貞丈はこの歌があることを根拠に、その著『貞丈雑記・巻一』で、「堀川院御代（九世紀後半の平安前期）に既に此の事ありしなれば、其の始りは猶ほそれよりも昔の事なるべし」と考証している。

＊

平安時代に始まったと思われる門松の習慣は、室町時代には、千年の長寿の象徴の松に加えて、「万世をかざる植物」（万年の長寿を約束する）竹も添えられるようになり、江戸時代になると、梅までも加えられて「松竹梅」の三つの慶でたい植物を並べて飾るようになった。

資料例 『室町殿年中恒例記』の十二月二十六日の條に「今日御立松つくり申し候なり。仍て御太刀被下之」とあるが『貞丈雑記』の註には「近年は晦日に作り申し候なり」とある。

つまり、室町時代初期のころは、十二月の二十六日から早くも門松を作っていたが、江戸時代になると、門松はみな大晦日に作るようになったということである。新年になつてはじめて、門松が立っている意義があるのであるから、やはり大晦日に立てる（作る）のが本筋というものである。——二十九日はニク立て、大晦日には立てるものではない、などというタブーめいた通説には何ら根拠はない。

江戸時代も中期になると、門松は円錐形や円柱形に足をつけて立てるものも出て来た（挿図『日本歳時記』巻一の挿絵を参照）。足を三本足にしてそれに縄を巻いたものや、薪を松竹のまわりに丸くまわして台としたものもあった。特に江戸の街では、門松に立てる三本の竹（孟宗竹）は、元龜三年（一五七二年）徳川家康が武田信玄と戦つて

敗れた口惜しさを忘れないようにと、武田の首を斬る、という心から、必ず竹の頭部を斜めに切ることになった、ということである。なお『日本歳時記』によると、「門松を立てるのは、正月元旦より一月の月半ばまで」であつた。



貝原益軒『日本歳時記』巻一



『女有職亭文庫』



『女用続文章』(文政四年)



『永楽新童訓往来』



『女小学』

※

ところで、門松とは読んで字の如く、門の左右に飾る松のことである。それでは、門構えのない家では松を飾りようがない。そこで、江戸時代、門構えのない商家や長屋などでは、家の入口のところに、松の枝を釘で打ち込んで松飾りの代りとしたのだった。(喜多川守貞『近世風俗志』)

これに倣って、現在では、私が考案し提唱した「松の枝包み」の「折形」を扉や入口に飾ることが広く普及している。

※

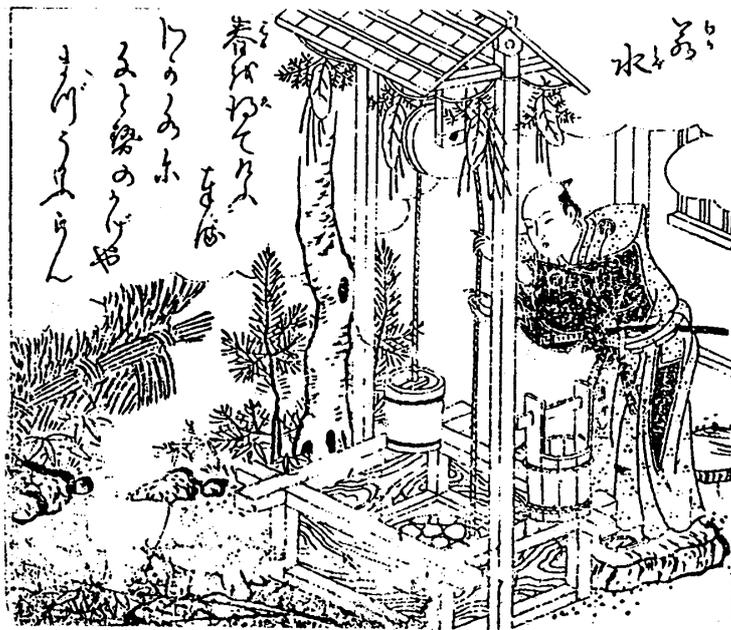
以上、簡略に資料を辿って説明して来たが、すべての資料には一つとして「トシガミサマ」も「ヨリシロ」も出てこない。そんなオドロオドロのものよりもっと哲学的なものだったのだ。

## 五、若水

年のはじめ、元旦の早朝、井戸から汲み上げる水を「若水」、又「初水」とも云う。春のはじめに汲むために若水といったのであろう。由来は古く、古代の宮中では、前年十二月の土用以前に、用水専門職の主水司(令制による宮内省の被管。水、粥、氷室などの事を掌る役所)が、恵方にあたる井戸を封じて一切水を汲み取らせなかった。そして立春の日の早朝に、この井戸から水を汲んで土の瓶に入れ女官を通して天皇に献じた。立春の日に若水を飲めば、その一年中の邪気を払い、年が若やぐと信じられていたのである。

参考資料例・『世諺問答』・『年中故実考』・『菊實年浪草』などなど。

江戸時代になると、武家でも庶民でも、正月元旦に初めて汲む水を「井花水」といい、一般には若水と稱えるようになった。(『日本歳時記』)。井戸には前年より注連縄を張っておき、元旦早朝、上下姿で若水を汲んだ。若水を汲むのは若い男(年男という)の役であった(『日次記事』)。



『女訓三才図会 全』(明和四年)

武家の家では、齒朶しだを本もとの方を右にして、讓葉ゆずりはを本を前にして盥たらいに入れ、そこに若水を入れ、この水で口を濯すすいだり顔を洗ったり髪をととのえたりして、元日の身づくろいをした。その際、手巾と楊枝（齒ブラシのこと）は團扇うちわか扇の上に据え置いた（『今川大双紙』）。

また、若水を沸わかかすことを「福沸ふくわかし」といって、正月の料理用に使った。また、若水で茶を点じ、梅干や昆布、あるいは黒豆や山椒などをに入れて飲むことを「大福おおふく（服）茶ちや」、あるいは「福茶」とも云った。これは、元旦に年中の悪気を拂うため、といわれている。

江戸時代には主人から始まって一家全員がこの「大福茶」を飲んだ。『本朝食鑑』や『日次記事』などによると、茶は百草ひゃくそうの魁きであることを喜ぶことから来た、という。「大福」を「多福」にかけて祝う正月の縁起祝いの行事である。

## 六、鏡餅

米の餅を、三種の神器の一つ、八咫鏡やたがみに模して円形に平たく作ったものを「鏡餅」といった。『古事記』『日本書記』によれば、天照大神が天岩戸に隠れた時、石凝姥命いしこりどののみことが作って真賢木まさかきの中枝に取りかけた大きな（八尺または八咫の）鏡は、その後、天孫降臨した折に、天照大神が、

「この鏡は、もつばら我が御魂みたまとして、吾が前を拜いくが如く拜いき奉まうれ」

と詔みことのりして天孫ニニギノミコトに賜たまわったものであって、以後天皇の

位の徴證として天皇家に伝えられた神器である。

この傳承もあって、古来、神前には円形の鏡を置いて祀まつるのが日本の礼式だったし、また餅も神前に捧げるものとして古くから用いられていた。そして、奈良朝のころから、神に供えるものとして「鏡餅」が用いられ、特に正月飾りとしては欠かすことのできないものとなった。

この鏡餅を食することを、また「齒固め」とも云った。平安時代初期には、正月三カ日の間、鏡餅、猪、鹿、押鮎、大根、瓜などを食べる行事のことであって、「人は齒を以て命とする故に齒という字を『よはひ』（齡）とも訓むなり」（『日本歳時記』）、故に齒固めというのは、よわい（齡）を固めるという意こころ、長命を願うことである。そしてこの習慣は、中国古代に正月で用いられた膠牙錫こうがせい（飴）という行事の模倣である、といわれている（『荊楚歳時記』ほか）。

そして平安中期以降の宮中の「御齒固おはがため」は、高杯たかづきの上に鏡餅一重ね、押鮎、大根、橘たちばな、柊ひいらぎを盛る、というものであった。

＊

室町時代になると、床の間というものが出現し、齒固は武家礼式の中の単なる床飾りとなつて、食礼の意味はうすれ、この武家の床飾りは後世、民間一般の鏡餅飾りとなつて広く普及したのである。

＊

ところで武家では鏡餅は軍神に供えたものだった。

「正月鏡餅を鑑よろいに供そなふる事、軍神を祭るなり。京都將軍家には、正月二十日に御具足ぐそくの餅の祝いわいありし由、正月祝儀飾がらうの絵に見えたり。」

伊勢貞丈『貞丈雜記』

室町時代から將軍家では、正月に、鑑よろい甲いかぶとを入れる箱よろいばこ（鑑櫃よろいびつ）、又は具足箱ぐそくばこ）の上にこの鏡餅を据え供えて軍神を祀まつった、というのである。鑑甲いかぶとのことを具足ぐそくともいい、この具足を入れる箱の上に供えたから、この餅のことを「具足餅」ともいった。

公家で作る餅は円形であったのに対して、武家では、武家独特の様式を出そうと、この円形を少し「細長き」円形にした。

『鎌倉年中行事』にいわく、正月十五日より内に御齒固はがための御祝あり。平人の祝いわいに見る圓鏡まるかがみのようにはあらず（円鏡ト丸き餅のことなり）ほそ長き御鏡なり。……

『貞丈雜記』

武家の鏡餅は長隋円形であった。その他、公家の円形に対して、もつとハッキリ形を変えて菱形の餅を用いた、という故実もある。『年中定例記』によれば、室町時代の武家は、三方に土器かわらけと餛あめめを置き、紅白の菱餅十二枚を若松と共に折敷おしきの上に置いてこれに箸を添えた。

武家の長檜円の鏡餅や菱形の紅白の餅の飾りは、のちに折衷されて、武家では、長檜円の餅二枚の上に、少し小型の紅白の菱形餅を奇数で置いた餅飾もちりをするようになった。

※

江戸時代に人ると、一般家庭の鏡餅飾りは武家流にあやかって一定の形式かたが普及するようになった。『諸礼当用集』（明治二年刊）などの礼法書に見える平均的な鏡餅飾りは次のようなものである。

白木さんぼうの三方さんぼうの上に、三方向に出て垂れるように奉書などの和紙を敷き、齒朶しだと讓葉ゆずりはを四方に出るように置いた上に、鏡餅を二枚（一重ね）据すえる。適當なところに熨斗のしあわび鮑あわび包みを置き、三方の折敷の四方の空いているところに、栗、柿、柑子こしじ、柚、野老とら、若松などを配置し、前方に昆布を二枚垂らす。

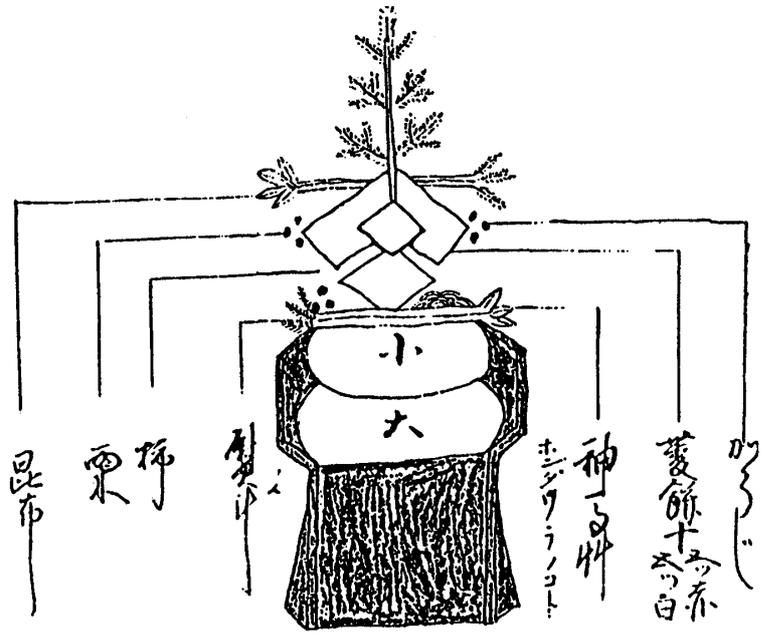
飾り方は基本的には大差はないけれど、この外いろいろの仕様がであった。江戸時代、一般社会に広く普及して生活の規範として家庭内の女性に強い教化力を及ぼしていた古礼法書『女諸禮集』（万治三年）には、次のように記されている。

三方さんぼうに奉書二枚、上に松枝、その前に鏡餅一重ね、その前に、昆布二枚を紙で巻いて水引で結んだものを齒朶しだの上にのせ、後ろの所に熨斗のし二枚を和紙で包んで水引で結んだものをのせる。向かって右向みぎむかひこうに鮑熨斗あわびのしで俵の形に作ったものを三つ、此方には蜜柑三つ、向かって左向ひだりむかひこうに柿三つ、此方に栗三つ置く。餅の上には紅白の菱餅の一重ねを六つ置いて一年の十二カ月を示す。

また『絵本艶庭訓』などでは、三方の上に紙、齒朶、讓葉、鏡餅一重ね、昆布、串柿、海老などを置く、などとある。

※

しかし、京都を中心とした武家社会で、現在の重詰のお節料理の源となった蓬菜飾りが同時に正月飾りとして用いられるようになると、前述の食料と大同小異のものが盛られているために、この鏡餅飾りは、明治以降次第に簡素なものになった。——三方の上に紙、齒朶、讓葉、ゆず、若松、だけということである。



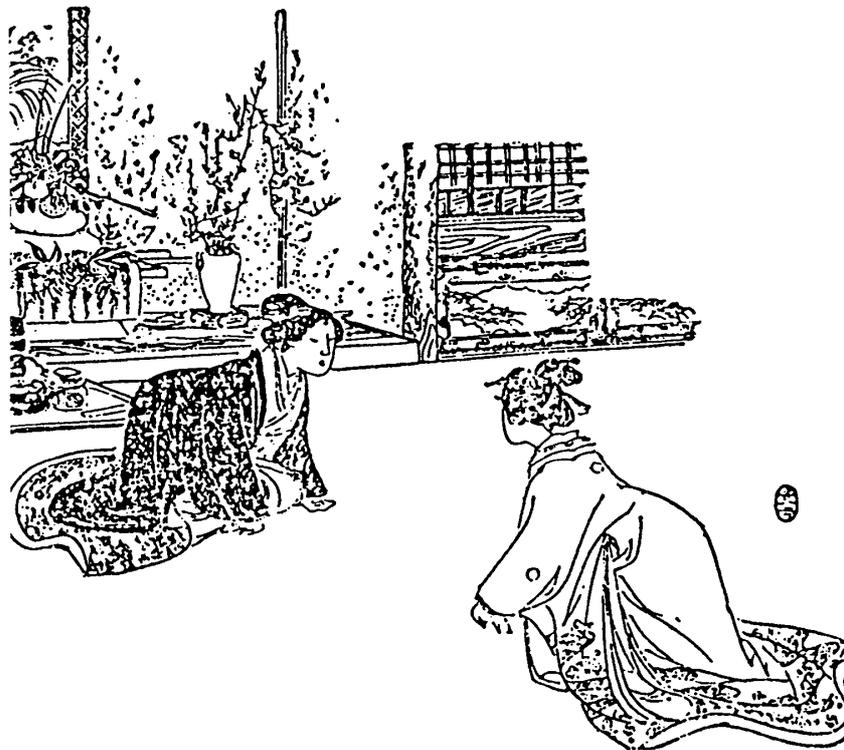
『礼法秘伝書』(筆者所蔵)



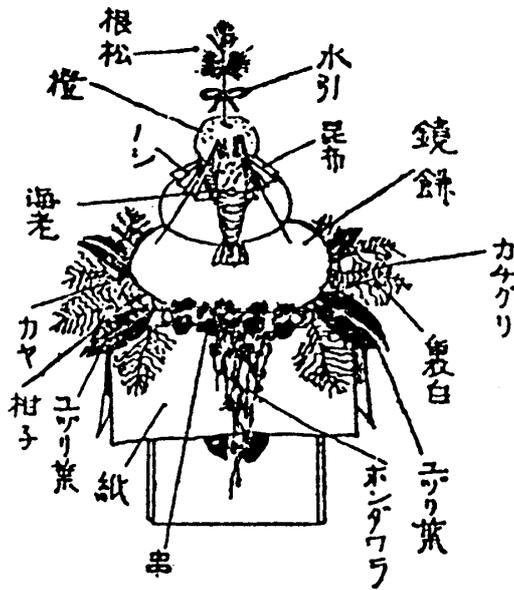
『女訓三才図会』(明和四年)



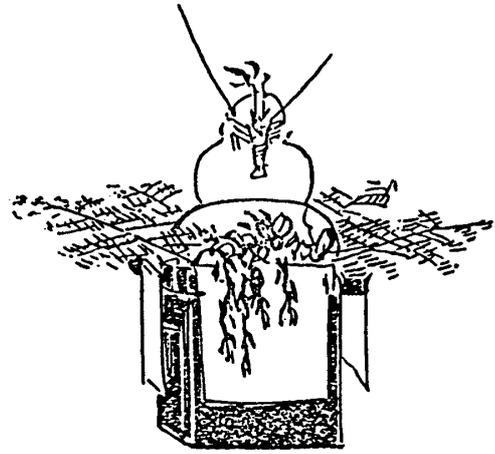
『繪本今川狀 下』(文政八年)



『和洋禮式』(明治二十五年刊)



『婦女界』(昭和四年一月号)に「お飾りの仕方」という解説があるので紹介しておく。



『礼法書』(明治時代)

## 七、雑煮

室町時代、幕府殿中の礼法の一切を掌っていた礼法家の伊勢家が、正月儀式の一つとして雑煮の献立を創案した。——始めは「烹雑」といった。(烹とは割烹料理などと現在でも使われている字で、物を煮ることである。)——その献立は、餅、鮑、煎海鼠、焼栗、山の芋、里の芋、大豆の七種に「たれ味噌」というものであった。(『伊勢家禮式雑書』)その後、正月には欠かすことのできないものとして、広く武家社会に行きわたった。

しかし、その後、鏡餅を祝う宮中の「齒固」の行事が取り入れられて、大根その他の食料を入れるようになり、やがて地方によりその品目を異にするようになった。江戸元禄期ごろの献立を見てみよう。『日本歳時記』(貞享二年、一六八四年刊)では「昨年作っておいた餅に、こんぶ、打あわび、煎海參、牛蒡、やまのいも、菘、栗、するめ、だいこん、いも等を加えて煮て、あつものとしたもの」が一般的な雑煮であった。そして貝原益軒は「雑多のものを煮たから、俗に雑煮」と記している。——文字組みから見ると、とかく雑多のものをゴツタ煮するものだ、という考えにおち入りやすく、こういう考え方が広がっていたのに対し、山鹿素行は「武家事紀」(寛文十三年一六七三年刊)の中で、その誤りを指摘している。

「雑煮とは俗に云うへさわに」と云うことなり。へさわに」と云う

のは疎略に致し三沸これを煮ることなり。故に雑煮と書けり。俗に品々の物を入れてこれを煮る故、雑煮と云うと心得るはもつとも非なり。雑煮は餅のものなり。別に入る物なし。」

※

雑煮は、日本各地でその土地々々の産物を用い、あるいは各地の風土によつて様々に改変されていつて、現在でも実に多種多様な献立で食されているが、不思議と正月の雑煮だけは自分の身内だけで祝つてゐるために、自分が幼ない時から食べていた雑煮が日本全土共通の「ぞうじ」だ、と思ひ込んでゐる人が大半である。他県他地方の「ぞうじ」を食べる機会はほとんどないからである。

※

雑煮の祝膳には、黒塗（又は朱塗）で紋の付いた懸盤か蝶足膳が使われ、箸は正月早々折れることを忌むことから太い箸を使う。これを太箸と云い、柳材などで作られた白木の箸である。椀は黒漆塗のものを用いる。

## 八、屠蘇

清浄な一室に一家の者が集まつて新春の賀の詞（正月の挨拶）を交わし終つたら、一同で屠蘇酒を飲んでお祝いとする。屠蘇は中国で始まつた。中国の昔、ある人が草庵に住んでいて、毎年大晦日の夜、一般庶民に薬一袋を贈り、この薬を袋に入れて井戸の中の水に浸させ、元日の朝、これを井戸から引き上げて、この袋を酒樽に入れてそ

こから飲むことを勧めた。これを屠蘇酒といった。これを飲めば、一年間、瘟疫（傳染病）に罹らない効目があるからだ、と中国古典の『歳花記』にある。これが起源のようだが、また、唐の時代の孫思邈という人が作つた靈薬とも云われている（『四時纂要』）。

我が国で屠蘇白散を飲むようになったのは平安朝、嵯峨天皇の弘仁年間からといわれ、唐にならつて宮中で毎年使われるようになったという。その後日本全土で慣習となり、元日には屠蘇散を飲み、二日には白散を使い、三日には度嶂散を用いることになつてゐた。（『日本歳時記』）。

※

屠蘇の屠は「ほふる」と訓み、蘇は「すみかえる」と訓ずるといわれている。また李時珍の説では「蘇は魁鬼の名で、このくすりは鬼爽を屠り割く」という。——とにかく、鬼気を屠り絶ち人の魂を蘇生させ、一年間の瘟疫（疫病）を除く効果がある薬だ、と信じられて、年の始めに飲まれるようになったのである。

『公家年事』によると、平安朝からの宮中のしきたりは、次のような手段を踏んで行われていた。白散を主体とした薬を緋色の絹の三角の袋に入れて、それを長さ一尺二寸（約四〇センチ）の桃か柳の枝に吊す（桃は鬼気をはらうと信じられていたからである）。それを大晦日の亥の刻（午後九時ごろから十時前後まで）に恵方の井戸の中、水面から一尺（約三〇センチ）上あたりに釣り下げる。これは地中から立ち上る青陽の氣（春の陽氣）を吸収させるためである。元旦の寅の刻（午前四時半ごろ）に井戸から引き上げ、桃の枝に吊り下げたま

FUZOKU GAHŌ  
An Illustrated Magazine of Japanese Life.



Published by **KOYODO**  
Tōrishinkokuchō, Kanda, Tōkyō, Japan.

ま袋を銚子（又は提子）の中の酒に浸す。そして中国の故事（「禮礼」）にならって、年少の者から飲み始めて年長の者に至る。

『礼記』

君ノ薬ヲ飲ムニハ臣先ズ嘗ム。

親ノ薬ヲ飲ムニハ子先ズ嘗ム。

※

『下学集』には

「二人飲めば一家病なく一家これを飲めば一里病なし」とある。

※

また『時鏡新書』では、「幼い者はこれから歳月を重ねて行くのだから真先きに飲み、老いた人はだんだん歳を失ってゆくものだから、あとから屠蘇を飲むのだ」と説いている。

※

しかし、「こんな迷信的な習慣は、幼少の者に不遜の心を教えることでよくない。長幼の序は正しくしなければならぬ」と説いた中国の人（盧柳南）もいた。

※

この屠蘇を飲む行事は正月三日間つづけられた。

※

屠蘇の処方にはさまざまな種類があった。江戸期の、屠蘇などを専門職とした半井家（半井出雲守）の処方では、山椒、防風、白朮、桔梗を各一匁（約三・七五グラム）、肉桂五分（約一・九グラム）、大

黄三分半（約一・三グラム）というものであった（『年中行事故実考』）。

山椒は、その実が胃を健康にし、回虫駆除に効能あり、とされたセリ科の多年草である。

防風は、その根を煎じて發汗や痰の薬とされた。

白朮とは、求（キク科の多年草）の外皮を除いたもので、健胃剤

としての生薬である。

桔梗とは、桔梗の根を乾かしたもので、痰、咳止めの薬。

肉桂とは、肉桂の樹皮を乾燥させたものをいい、香辛料としての外

に、胃腸に効能ありとされている。

大黃は、タデ科の多年草である大黃の根茎を乾燥させたものこと

で、健胃剤であった。

つまり、屠蘇というのは漢方薬を調合したものである。（『年中行事故実考』。武家では、宮中の行事にあやかっつて、室町時代から白散だけの屠蘇酒で祝った。「白散」とは、山椒、防風、肉桂、桔梗などを刻んだものであり、やはり漢方薬である。）

※

嘗つては、屠蘇という漢方薬（現在は「屠蘇散」と称して市販されている）を銚子の中の酒に浸して、この銚子から屠蘇酒を盃に注いで各人がそれを飲んで祝ったのだが、やがて銚子の代りに丸い柄のついた器「提子」も使われるようになった。そして正月の厳かな儀式であるので、この屠蘇の入った提子の丸い柄の上に「蝶花形」という折形を結びつけて慶事を祝った。この和紙の飾り（折形）は、現在

では、神前結婚式の神酒の器の飾りに残っている。

銚子とは、酒を盃に注ぐのに用いる器である。長い柄がついており、片方または両方に注ぎ口がついていて、木製または金属製である。現在でも、神前結婚式などに用いられている。

提子とは、菓罐のような形をしたもので、恐らく明治中期ごろと思われるが、その頃から、黒漆塗の屠蘇器一式が生産販売されるようになって、それが一般に普及して、やがて高価な金蒔絵の施された黒漆塗の屠蘇器一式が購入され、豊かな家庭で使われるようになった。それでは高過ぎて揃えられない一般庶民のために、漆塗のような仕上げをしたプラスチック製の代用の器一式がここ十数年来比較的安価で大量に生産市販されるようになった。

※

屠蘇は、平安の昔から、邪気を去り疫病をはらう慶い薬であり、屠蘇酒は年の始めに飲んで新しい年の健康を祈る飲料であった。

### 九、蓬萊（喰積）

蓬萊とは蓬萊山のこと、中国の傳説によると、はるか東の海上にあつて、そこには仙人が住み、不老不死の地である靈山である。この靈山の果物などを食すれば不老不死となる、といわれた。この傳説上の神仙な鳥の名にあやかって、長壽を祝い願う心から、年の初めの盛り物の名としたのであつた。

始めは、小笠原流婚禮の床飾りとして「奈良蓬萊」が創案された

が、この奈良蓬萊の横には、昔は二重台、手掛台があつて、三々九度の盃の前に手掛台の品に手を掛けて食して祝う風習があつたが、この婚礼の際の床飾りが正月の蓬萊に應用されたと見られる。

蓬萊を正月の床飾りとして床の間に飾るようになったのは室町時代からである。山鹿素行の『武家事紀』（寛文十三年・一六七三年）第四十七の「年中行事」正月の項には、次のように記されている。

#### 蓬萊

山をかたどり、鶴、亀、松、竹をこしらへて、其中に仙人をつくる作り物なり。正月これを座敷に飾りて、我も見、人もこれを見て、相祝するなり。蓬萊は日本の異名なり。我が国の像を見て祝せんことは、もつとも其の時宜にかなへり。今の俗、米を以て山の形をなし、上に小松を根ながら引う（植）へ、祝ふべきの菓子を載す。是れすなわち古の蓬萊の作り物の遺制なり。其の上に食するに堪へるべきの物、祝いに堪へるべきの物をあつめ載する事は、近代の風儀。もつとも、野人の制（なれば）、これを論ずるに足らざるなり。宗尊親王の時、御息所御方に風流を進ず、と『東鑑』に出でたり。然るを近時は菓子を蓬萊と云うと心得（えたるは）誤りなり。

※

室町時代末までは若松だけを立てていたのだが、江戸時代になると、松のほかに竹までもが添えられた。貝原益軒の『日本歳時記』

（貞享二年・一六八四年）には、

盤上に松・竹・鶴などを作りて据え、栗、榧、海藻、蝦、蜜柑、柑子、橘、米、柿など積み重ねて、これをなん歳初に來る賀客にもこれをすすむ。これを蓬萊という。

と記されている。この蓬萊のことを江戸では「くいつみ」（喰摘、喰積）といった。日本最初のアイウエオ順の西洋式百科辞典の『日本百科大辞典』（富山房刊、明治三十三年より大正初期まで続けて刊行）の中の「くいつみ」の項を引用する。（明治四十三年）

正月の式に賀客に供する取肴。三方又は供餐（四方）の上に、米・餅・勝栗・榧・柑子・橙・串柿・海老・鱒・鯉・鯛・唐・熨斗・昆布・松・橘・齒朶・榕葉・馬尾藻等を盛りたるものなり。また正月のみならず、常の式にも三方に、米・熨斗・昆布を盛りにて始饗と号して出だすこと古例なり。春は一層賀するによりて色色のものを取り集めてこれを盛るなり。

（中略……『日本歳時記』の引用）

ここ（日本歳時記）に蓬萊というのは、喰摘のことを指したるものにて、近世は喰摘を重詰めにし、蓬萊は別に飾れど、古は生のままにてすすめたり、という。この分離後の蓬萊をなお喰摘に誤まるものあり。——これに就き、『増補俳諧歳時記葉草』に、青藍の云う「今の俗、誤りて蓬萊台を喰積といえるゆえに俳諧者流もまた同物と心得たる者なし。昔食積と唱えしは今の重詰の類に

て、賀客饗應の具なれば、連句には必ず食類の差合を繰るべし」と。

食つみをぼつぼつあらず夫婦かな 嵐雪

食つみや山居の味を覚え初 柳居

※

さらにもう一冊、明治四十三年刊の『新選・日本諸禮大全』（法橋竹蔭著）を引用しよう。

#### ◎蓬萊の臺飾り方

蓬萊の臺は喰積臺ともいひます。この臺は常盤に堅盤に動きなき千五百秋の瑞穂の国の様を形どりたるものにて、山海の物を置きますは、海神大綿津見神、山神大山津見神、野神鹿屋野比賣神等の御恵みを、人に進め我も祝い、此の年も幸あれと祈る心よりなれるものである、と旧記に見えてあります。

さて、之れが飾り方は、衝立、即ち三方に紙を一重、四方へ垂るゝ様に敷きまして、裏白、ゆずり葉を人の前になる方を明けおきまして、葉先を貴人に向けぬ様、左右向うへ敷いて、其の上に白米を向高に蒔き、さて山海野ものというて、昆布、海老、神馬藻、栗、柏、野老、串柿、田作、根松などを飾ります。

根松は本を花包にて包み、葉を左にして海老も頭を左にして、柿は枝柿でしたら帯を手前にし、串柿ならば紙に包みて、穂俵は手一束に切りて藁に巻き、栗、柏、野老の三種は包み、また橙、梅干、蕨、数子をもそえて上に置くのです。——すべて山の物は

向うに、海の物は手前にして置くものであります。

※

古い資料を二、三引用したが、実は蓬莱の飾り方には、これがキマリだ、という型はなく、格式ある御家々々の家柄や家風などによって種々まちまちで異ってはいるのだが、保存食料に近い「おめでたい」と思われる食料を盛り上げるといふ基本的な原則は同じである。

三方向に孔（象眼という）をあけた白木の台（三方）の折敷の上に、奉書などの和紙を四つの方向に端を出して垂れ下がるように敷く。その上に、齒朶、讓葉、昆布を置く。更にその上に、米・榎・搗栗・穂俵・串柿・橘・橙・柚・蜜柑・野老・海老・梅干などを積み上げるのである。

## 蓬莱



『女大学教文庫』（寛保三年）



『女用千尋浜』（安永九年）画図：下河辺拾水

※

三方さんぽうの上に盛り上げる食料は、すべて慶めででたいとされている食べ物ばかりである。種々の古典籍から拾い上げて、その食料の一つ一つの由来を列挙してみる。

齒朶しだ（次第しだいとも書いた。）中国では貴衆と云い、また形が鳳凰ほうおうの尾の

ように見えたので「鳳凰草」とも云った。俗に「ウラジロ」という草で、「穂永草」と呼ばれたこともある。そして齒朶の「齒」は齡と同義で、長壽を表わし、更にこの草が霜や雪にあつても萎しぼまないという生命力を喜び、また語呂から「しだいしだい」に運が良くなる」とこじつけて喜んだ。

（註）「ウラジロ」を用いるというキマリから、最近シダの葉を裏返えしてウラの白い方を出して飾るのがウラジロだと思ひこんでいる人が多いようだが、「ウラジロ」というのは「ウラジロ科の常緑シダ植物」（広辞苑）なのである。つまり我々が日常目にするシダ植物のことである。だから、ことばの思い違いから、シダの葉を裏返えして使うのは間違い。ウラを出さずに表のまま飾ればいいのである。

讓葉ゆずりは 古来より「親子草」とも云った。それは、その葉が、若葉が

出るとそれに讓ゆずつて下に落ちるために、古歌にも、

年毎に断えずや生る親子草  
人にしたしき人や咲くらん

と歌われたように、父から子へと連続して断えることなく綿々と続いてゆくことを表わしていると考えられ、『枕草子』にも、この讓葉が正月の行事には欠かすことの出来ない植物であったと記されている（『武家事紀』卷四十七、ほか）。

昆布こんぶ 「広布」とも書き「夷布」とも呼んだ。「こんぶ」を「よろこんぶ」と語呂を合わせて慶めででたいものとして祝った。

米 一名「富草」ともいい、百穀の王として人に壽を与えるものと考えられた。

榧かじわ 「柏」と同じで、その実から作った膏こうには延壽の効があると考えられた。

搗栗かき 「搗ち」が「勝」に通じるとして、武家社会によるこばれた。

穂俵ほだわら ホンダワラという海藻を干した藁わらで束ねて米俵の形にしたもので、穂も俵も共に慶めででたいものとされた。

串柿 柿に七絶ありといわれ、柿の実は長生の薬とされ（寿効ありといわれ）、また、柿の訓よみから、萬物をかき集める、と語呂を合あわせてよろこんだ。

橘たちばな 百果の長で、冬も緑の色あせず、更にその実は万病を除くと

いわれた。

橙だいだい 「回春橙」とも云われるように、果実は冬熟して黄色になる

が、翌年の夏には再び緑色になるのを慶めでたいたとした。更に橙の訓みから、代々家がつづくように、と訓んで、家の繁栄の祈りをこめた。

柚ゆず 「ユウ」とよむから「悠々たる」の語呂に通じさせた。

野老どろ ヤマイモ科の多年生蔓草で、「老」の字を慶しとし、また鬚ひげの長い老人に擬なぞらえてあやかろうとした。

海老えび 右と同じく「老」の字を喜び、更にその曲まがった形が老人の腰の屈まがった姿に似ているとして、その長壽にあやかろうとした。また海老の赤い色は陽の色であるとしてよろこんだ。

梅干うめぼし 「松竹梅」の梅であり、万病を除く効あるものとされた。又その色の赤いのを陽の色とし、皺しわのある姿を老人になぞらえて長壽の願いをこめた。

＊

蓬萊あるいは喰摘喰積は、来客があれば座敷に招じ入れて先ず蓬萊台を持ち出してこれを客に食べさせることが室町末期より明治期

まで行なわれていた。

## 十、結びのことば

上述した項目の他に、「注連縄」「床の間飾り」などを究明したが、紙敷制限のため割愛した。更に、元旦以後の正月行事、人日・上巳・端午・七夕・重陽の五節句や、嘉祥かしょう（喜定喰かじようぐい）、八朔はつさく、中元、観月など、室町幕府以来、江戸幕府でも重要視されていた行事が一般庶民にまで行きわたっていた様式や、婚礼の禮式の変遷や方式など、一般日常生活の中の礼法やしきたりの起源や流れ（変遷）を、すべて信頼のおける古典籍に基いて研究解明して行く心づもりである。

〈参考〉拙著『日本の折形』（昭和六十二年、講談社刊行）を主とした私の諸著作に、箇略に上述の研究成果を要約して記述しておいたので、参照されたい。

＊

以上、簡単に考察して来たように、都市生活に於いて格式ある家の家庭内での正月行事の「もの」と「こと」には、初めに触れたように、年・神・さまとか霊とか依代とかハレとかケとかの呪術的土俗的な信仰（？）迷信（？）の片鱗も見出せない。そんなオドロオドロのものではなくて、まことに清らかで厳肅なものばかりであった。室町時代以来、一宗教、一民間俗信かたよに偏ることのない、キリリとしたものであった。（もつとも、江戸末期になると、一般庶民向けの啓家書の中には、年・神やハレやケなどの觀念に言及しているものが一、二冊はあつ

た。)

日本人の生活行事は、古来、清らかであり、卒直であり、厳肅さを規範として一貫させていたことが解明できたと思う。

※

(追記) 本稿執筆に當つては、風俗史研究の大先達、江馬務氏の著作集の研究記述に負う所大である。

※

◎本稿に掲載した挿図について

江戸時代の一般庶民の日常生活を描写した絵画は全く無い、と云つてよい程、数少ない。日本美術は、山水画であり花鳥画であり、浮世

絵である。世間を写した浮世絵だから、平均的日本人の生活が描かれているか、という点、その題材は、芝居役者や遊廓の女性や相撲取りなどに限られていて、平均的日本人への接点はない。

平均的日本人の生活を描いた図は、実は、江戸中期以降、印刷術の普及と共に大量に印刷出版された庶民向け啓家書の中に少しづつ見受けられるのだ。『女大学』『女今川』『実語教・童子教』『女庭訓往来』などなど、教育史では「往来物」と名付けられた数々の「女訓書」の中に、貴重な視覚的な情報がちりばめられている。そんな刊本を丹念に数十年にわたって蒐集しつづけて、その中から明確な線描図を選んで、本文記述の参照とした。

(本学教授Ⅱ美学・東西文化史担当)